

松平家史料展示室 企画展

心を燃やした15日間 ～ 東京 1 9 6 4 ～

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 松平家史料展示室
- 会期 令和3年5月22日(土)～8月1日(日)
- 休館日 5月31日(月)、6月1日(火)、7日(月)、14日(月)、15日(火)、21日(月)、28日(月)、29日(火)、7月5日(月)、12日(月)、19日(月)、20日(火)

昭和39(1964)年の東京オリンピックでは、選手が競技に情熱を燃やしたのはもちろんですが、大会を支えた多くの裏方の人々もまた、情熱的に仕事をこなしました。本展では、当館が所蔵する資料から、そうした人々の活躍ぶりや興味深いエピソードなどを紹介します。

第1章 競技に心を燃やす

オリンピックはスポーツ選手たちの祭典であり、金メダルの獲得を目指して日々の鍛錬に情熱を注ぎました。花形競技のマラソンは日本代表のメダル獲得が有力であったことから、国内の注目度は非常に高いものでした。一方、注目度の高くない競技もありました。自転車競技などもそうでしたが、選手は日本代表として気を抜くことなく、懸命に取り組みました。



つばらや
競技中の円谷幸吉選手 (写真:当館蔵)



自転車競技の様子 (写真:当館蔵)

第2章 運営に心を燃やす

オリンピックの開催は国を挙げて取り組まれ、自衛隊も人員や車両などを動員して、大規模な支援を行いました。当館の元館長である松平永芳氏は当時、陸上自衛隊に所属しており、近代五種競技を中心に様々な競技の支援に携わっていました。大会運営には自衛隊だけでも約7,000人が関わり、その他、組織委員会、警察、競技団体など様々な関係者もおり、多くの場面で熱く議論が交わされたと思われます。松平氏が使用した書類には、そうしたことがうかがえるものが残っています。



競技役員用ブレザーコート (当館蔵)



松平永芳氏使用書類 (当館蔵)

第3章 聖火リレーに心を燃やす

福井県では9月28日から30日にかけて県内を横断する聖火リレーが行なわれました。リレーを一目見ようと沿道に集まった人々を写した当時の写真からは、日本開催のオリンピックを待望していた市民の様子がうかがえます。



聖火リレーで使ったトーチ（当館蔵）



聖火リレーの様子（写真:当館蔵）

第4章 デザインに心を燃やす

オリンピックは当時国内で活動するデザイナーたちにとっても、一大プロジェクトでした。昭和35（1960）年に日本デザイン界のドリームチームともいえる人々が招集されて「デザイン懇話会」が発足します。この中で、ポスターを始めとした運営に関わる様々なものがデザインされました。デザイナーたちは予算と期限に厳しい制約を受けながらも総力戦で立ち向かい、日本のデザイン史に残る仕事をやり遂げました。それは、東京オリンピックで使用された後、国際的に使用されるようになった、施設の表示案内（ピクトグラム）に代表されるように、現在でもその様子を確認することができます。



絵はがき（当館蔵）



記念メダル類（当館蔵）

次回の展示

松平家史料展示室 企画展「没後100年 福田源三郎と郷土の美術」

令和3年8月5日（木）～10月5日（火）

展示解説シート No.141

令和3年5月22日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 白嶋 祐司

印刷 株式会社印刷